
二つの月に、一つの願いを

双月 亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つの月に、一つの願いを

【ΖΖコード】

N1966F

【作者名】

双月 亮

【あらすじ】

世界に選ばれた少年と少女は、望みもしない力を得てしまう。それでも新たな世界で泣いて、笑って、悩みながら、少しづつ積み重ねていく平穏な日々。しかし世界が見る夢は少年達を否応無く混沌とした運命へと誘っていく。ただ一つの真実に向かって……。またと進行していく異世界召喚FTです。

序章 世界の見る夢

そつか

赤い光に包まれ、徐々に崩れしていく己の体を見ながら、太陽は低下した思考力の中で一つのことに気がつく。

二度目だ

今まで幾度となく繰り返してきた先見の力。この世界に来て初めて見た夢。

「」の事だったのか

幼かつた自分には分からなかつた。この世界を理解していなかつた自分には分からなかつた。あの夢が先見だつたと。

すまない

目の前の仲間たちは一様に立ち尽くし、自分の最期を見届けている。
そのなかで一人、泣き崩れる彼女を見て心が痛む。

すまない

もはや思考することも難しくなってきた意識の中で、唯一つ言葉が浮かび上がってくる。

たのむ。もう少しだけ

叶えたい。

最期に、最期に名を呼びたい。

後悔があった。憤怒があった。懺悔があった。悲嘆があった。
それでも己の半身である少女の名前を。
この世界でただ一つの少女の名前を。
溢れてくる。止まらない。

この愛情だけをこめて呼びたい。

最期に。もう一度

「
ま
り
か
」

第一章 1・世界に捨てられた日 1

「……………か……………」

朝の光が目を射す。口から出た痰^{たん}は秋の気配のする床^{じゆ}にかかる
りと溶けていく。

……………夢かあ……………

奇妙な夢を見た気がする。けどそんな事はかん……………け……………え
むい。

今朝はやたら眠氣^{ねうき}が取れない。それに昨日ははしゃぎ過^{すぎ}たから
体もだるくて、正直目を開けることも億劫だ。
なのにさつきから感じる朝の光が、起きろつ、起きろお、と攻め
立てるように瞼^{まぶた}の上から刺激^{せきせき}を与え続けてる。

くそお、茉莉花^{まいづら}の奴、カーテン開けたなあ……………

それでも強烈な睡魔^{すいま}のせいか閉じた瞼^{まぶた}が開かない、それに今日の
布団の感触^{しわ}はやけに気持ち良い。そのせいで余計に布団から出て行
く気が失せてくる。

なんで今日も学校あるんだよ……………

毎朝考える疑問^{ぎもん}だけど昨日のこともあって、強く思つ。

でもなあ起きねえと、茉莉花怖えーし。母ちゃんもつと怖えーし。

唐突に『母ちゃん』といつ単語で連想したのか何かがフラッシュ

バックする。今は暖かい布団の中にいるのに、なぜか背筋がゾクゾクしてきた。けれど眠気は依然として取れない。ただこのまま起きて、思い出てしまつた母ちゃんの激しい……が恐ろしいので、言つことの聞かない瞼を無理やり意志の力でこじ開け、上半身をムクリと起こす。

……金曜は……国語、算数、体育、理科……音楽……

起き抜けの思考力の働くかない頭で今日の時間割を整理してみる。そうやつてしまばらくぼうつとしていてたけど、徐々に鮮明になつてきた視界になにか違和感を覚えた。そう、最初に気になつたのは朝の光が射しこむ大きな窓。次に赤を基調とした色鮮やかな絨毯。

んあ？ まあ窓は窓だなあ。それに母ちゃん絨毯敷いたんだあ。判断力の抜け落ちた頭で間違えていることに気付きながらも逃げるよつに視線を上にずらす。

んいや？ 天井たつかあ、それにわつかの電気とつたんだあ。決定的な違和感を感じながらも何かに縋る様に部屋を見渡してみる。

あれえ？ 部屋ひれえ。畳六枚分だつて母ちゃんが言つてたけどこの部屋は段違いだあ。
もうわざと驚くことすら諦めたい。そう思いつつも一応やつてみた。けど少しむなしい。

言葉にしたくは無い。誰かに嘘だつて言つても良い。田の前の現実から逃げるような思考に反して、唐突に、笑えるほど簡単な疑問が口から漏れる。

「……………！」

記憶に間違いが無ければ昨日はちやんとベットで寝た。昨日は楽しかったし嬉しかったから興奮していただけ夜の十時には寝たと思う。そん時はこんなフカフカで柔らかいベットじゃなかつた。それにこのやたら広い部屋に見覚えな……ん……て…………。

グルリと改めて見ると部屋の中は本当に広い。家にある二部屋が全部入つても余りそうだ。それに椅子とか机とかは母ちやんが喜びそうな家具屋さんで売つてている奴みたいで、家にあるリサイクルショッフで買つた奴とは全然違う。と思つて。

よくわからんねえ。けど、すげーなあ…………

「……つそれビーハジヤねええ！」

だからこじりだよつ。あ、あれ？ そ、そつか誘拐かつ。身代金要求かあつ？ いや、で、でもまて、までまてえ、かかからだはぢづだり、しばり、しばられてないつ！？ お、落ち着けオレ。お一けー？ オレ。た、例えばだぞ、オレが誘拐されたとして、こんな風にほつとかれるか！？ オレだつたら縛るつ！ そーだ縛るつ！！

…………だつたら誘拐じゃない？

一度沸騰しかけていた頭が、出した答えに少しだけ落ち着きを取り戻す。けどはつきり言つてかなり不安だ。

「や、それなら、とと、とりあえずだ、母ちやんと父ちやんでも探す……かなあ？」

なんでこんな見たことも無い部屋に居るかは分からない。そもそも
モヒンがどこなのががさつぱりだ。だけど母ちゃんと父ちゃんを見
つけさえすれば全部分かる。はず。それにこの部屋には居ないけど、
昨日も一緒に部屋で寝てたんだ。なら茉莉花だつてどこかにいるは
ずだ。

モヒンまで考へ、ふと嫌な予感が過ぎる。

「モヒンがもしも悪の組織だつたりしたらどうする？」

今まで漠然だつた不安がハツキリとしたイメージとなり、茉莉花
の泣き顔を形作る。その瞬間、背筋がゾクッとした。だけどさつき
母ちゃんを思い出したときと違い、心がゾツとするような冷たさを
感じ、胸が締め付けられた様に苦しい。

「ぜ、絶対にオレが助けてやるからな。まつ待つてろよ茉莉花っ！」

「！」

声に出して不安を吹き払い、拳をグッと握り心を奮い立たす。

けつ決意完了だ！。

勇者インサイダー風に心のなかで唱えてみる。

ならまづモヒンの部屋から脱出だつ。それで母ちゃんと父ちゃん
よりも茉莉花が先だな。んで、もしモヒンが悪の組織だつたり
したらオレがけちょんけちょんにやつつけ

「おはよモヒンやれこまわ」

「ああ？ はよー」

唐突に右耳から入ってきた挨拶に反射的に返事をする。
言った後から心臓がバクバクいってるけど、とりあえずちょっと待ってほしい。

「どなたかお探しでしょうか?」

「あつうん、双子の妹なんだけどさ。あいつ今頃悪のそ……し……」

言葉が詰まる。息も詰まる。普通に会話しようつて頑張ったけどやつぱ無理だつた。

オレはちょっと時間が欲しかつただけなんだ……そつ、け、決意とか、覚悟とか? そういうのが完了する時間が欲しかつただけなんだつ!

今や心臓は最大限まで運動し、ハツキリと体全体でその鼓動を感じる。ドクンッドクンッドクンッと、まるで50M走を終えた直後みたいだ。

さつきから頭の中ですつと右、右だ、右見ろつて言つてる。
くそつ、分かつてるよ。

「ゴクリ」とのどを鳴らして唾を飲み込む。

次に緊張して正面に張り付いていた視線をそつと横にすらしてみる。

すると見えたのは体の前で上品に組まれた白い手。
さらに視線を徐々に上に移す。
母ちゃんよりは小さそつな胸。
茉莉花ぐらいのほつそりとした首。
窓から入る光に照らされて、スッと輝く肩で揃えられた金色の髪。

眼鏡の奥、少し冷たそうな、でも綺麗な空の色。

「妹……シャスアーシコース様のことで『ゼロ』ますね。お顔が似ていらっしゃるのもしゃ、と思つていましたが。なるほどお二人は双子でございましたか」

「つてあんただれだああ」

オレの絶叫が空気を震わす。それでも田の前のねーちゃんは身動き一つしなし、オレを見下ろす瞳からは何を考えているのかまったく読み取れない。まるで近所のネコと田が合った時と同じ緊張感が辺りを包む。それでも外せない視線で目の前のねーちゃんを観察しながら、まともない頭を何とか振り絞る。

と、とりあえず金と青なんだから、が、外人さんだらつ。それに変な服き……あつ、あーメメイドだ。そーだつ、な、なんだっけ……

……じ……じす……

……じすふれだああ！

「ハ、こすぴゅれねーちゃん。オ、オレを、じぶりすりゅきじりあ」

上手いかなかつたけど、精一杯威嚇するよつてねーちゃんに怒鳴りつける。けどねーちゃんに何も変化は無い。といつか瞬きすりしているのか分からない。

じうある、じうあるんだよ？ やばいやばいやばい……？
てつ手先か、悪だ！ 改造？ ヘ、へんしんかあ！

「これは失礼いたしました。」挨拶がまだでしたね。本田より第52代ファシュシユース様付きのメイドをさせて頂くことになります。エレイテュイラ・アトロポスと申します。エティとお呼びください。」

そう言つて目の前のねーちゃんは頭を下げる。今度は完全に沸騰していた頭がねーちゃんの平たい冷たさを感じる声で急激に落ち着く。

ふあしゅしゅーす？ えれていーら？

何とか聞き取れた言葉もよく分からぬ。多分聞いたことも無い。な、なんなんだ訳分かねーぞ。なに言つてんだこのねーちゃん？今は大分冷めたけど、沸騰していた時に聞いたから全然理解できなかつた。

「『めんなさい。もう一回……』

なのでそつと人差し指を立ててお願いしてみる。若干腰が引けているのは『愛嬌だ。

「…………」

眼鏡の奥、透き通るような空色の瞳に見つめられる。

怖えーよ。このねーちゃん。なんでジッと見てるだけなんだよー
勇気を出して見続けているが、もうそれ限界だ。

なんか言えよー

心の中だけで言つてみる。

「…………」

「これは失礼いたしました。『』挨拶がまだでしたね。本日より第5
2代ファシュシユース様付きのメイドをさせて頂くことになります。
た。エレイテュイラ・アトロポスと申します。エティとお呼びください。」

もしかして、このねーちゃん同じことまんまと言つたか？　だけど
今度は頭下げなかつたぞ？

色々気になるけど、言葉自体はちゃんと聞くことはできた。でも
相変わらず訳が分からぬ。

ファシュなんぢやらつてオレのことへ、なら、このねーちゃんオ
レのメイド？

疑問が次々と浮かぶ。

「……えつと、エティねーちゃん？」

あれ？　ちがつた？　なんかまたジッと見てるし。

「……はい」

なんだ合つてんじやん。なんか納得できませんつて顔をしてたか
ら間違ってるかと思つた。

「そのファシュース？」

「ファシュシユースです」

どつちでも良いじやん。

「……やべ、それってオレのこと?」

「その通りです。貴方様は今代で第52代となじましたファシュシコース様となります。」

再度告げられた言葉の響きになんとなく心が躍る。
おお、なんか勇者っぽくない。オレ。
決意完了だ。勇者インサイダーだつ！

「い」理解いただけましたでしょつか?」

「あ、うん」

決意完了だ。

「それではお仕えさせて頂くにあたって、い」確認させて頂きたい事が有るのですが、よろしいでしょうか?」

か、確認? 勉強はできるのか? とかだつたらどうする。はつ
きつ言って茉莉花みたいに頭良くなこいぞ。
で、でも体育ならなんとかなるよな。そうだ春から一応空手始め
たし。茉莉花より運動神経いいぞつ。
聞かれる質問にドキドキしながらも、エティねーちゃんを促して
みる。

「う、うん。いこよ」

「では、お前をお伺いしてもよしこでしょつか?」

「いやにい、オレ言つてない！？」

まずいよ、自己紹介はされたらするのが基本だつて、父ちゃん言つてたじゃん。

ヤバイッ、せめて礼儀正しく言わないと、また、また母ちゃんに怒られるつー！

「そ、そつか、『めんなさい』」

慌てて頭を下げる。とつあえず『いつ』の時は謝つておけば大丈夫。その後頭を上げ、背筋をグッと伸ばす。

あー、エティねーちゃんの田を見たら、ちよつと緊張してきたつ。それでも覚悟を決めて、エティねーちゃんを見つめる自分の瞳に力を入れる。よ、良しつ、言つだつ。

「……えつと、一見太陽です。三上第三小学校三年二組、昨日で9歳になりました。夢は勇者インサイダーみたいな、正義の味方になることですー！」

朝のピンチと張つた空氣の中にオレの声が響き渡る。

いつして9歳になつて初めての朝は、メイドのエティねーちゃんとの挨拶から始まつた。

昨日と同じ今日が来るものだと疑いもしなかつた幼い俺の、運命の朝。

第一章 1・世界に捨てられた日 1（後書き）

皆々様、読んでくださりありがとうございました。

初執筆、初投稿といふことで見るも無残な感じの文章ですが、これからも頑張ります。

あと言い訳がましいですが、一応シリアスFTのつもりです。

ただし主人公が現在アレですからしばらくはコメディみたいな感じかも知れません。

そのへんも含めよろしくお願ひします。

双月 亮

とりあえず茉莉花は無事に発見できた。といつか隣の部屋だった。すぐに茉莉花を発見できたのは、オレの自己紹介がすんだ後、隣の部屋から盛大な泣き声が聞こえてきたからだ。その聞き覚えのある泣き声に急いでエティねーちゃんと駆けつけると、案の定茉莉花とエティねーちゃんに似ているメイドのねーちゃんが一緒に居た。その後盛大に泣く茉莉花をなんとか宥め、今はメイドのねーちゃん達が用意してくれた朝食を茉莉花と一人で食べている。ちなみに宥めようとしてちょっとぴり貰い泣きした事は、勇者の秘密だ。

「あれ？ 茉莉花全然食べてないじゃん。食わねーの？ めっちゃうまいぞ、これ」

オレの正面。朝食も食べず、泣きはらした目を隠すように俯いているのは、明日いけになることが決まった村の少女A……じやなくて妹の一見茉莉花。オレに似た黒目で、オレに似た鼻、オレに似た口。要するに双子。違うのは同じ黒い髪でもオレがボサボサの短髪で、茉莉花は肩の辺りまで綺麗に伸ばしてることと、オレが男で茉莉花が女つてことくらいだ。ちなみにオレらは母ちゃん似だ。

「逆に太陽はなんで食べられるのよ？ 知らない人から出されたものなのに……」

俯いたまま不貞腐れた声で茉莉花が呟く。茉莉花は初対面の人相手だとオレの後ろに隠れるぐらい人見知りだ。

「別に知らない人じゃないだろ。さつき自己紹介してくれたじゃん

「一人とも。」

そう言って一人のメイドのねーちゃん達が改めてしてくれた自己紹介を思い出す。まあ、エティねーちゃんのことは知っていたけど茉莉花の為にね。んでもう一人のメイドのねーちゃんっていうのが

「今日から第44代シャスマーケットの……まあ要するに茉莉花のメイドになつた、エイレーネ・アトロポスだ。レーネで良い。ほどほどによろしく。」

と、割とさばさばした感じのねーちゃんで、エティねーちゃんの金髪よりも少し落ち着いた茶色っぽいショートカット。目はキリッとした海の青でちよつとネコっぽかつた。んで身長はエティねーちゃんより頭一つ分は高い。父ちゃん位あるかも。胸は母ちゃん位あつたかな。要するに父ちゃんと母ちゃんとエティねーちゃんを合体させた感じだ。

まあ、そこまでは良かつたんだけど、その後がアレな感じだった

「名前で分かると思うが、エティは私の妹だ。太陽、エティに迷惑かけるなよ。なにかあつたらこのレーネ様じきじ、つて、おいつ、なにをする。は、放せエ」

と、紹介の途中でエティねーちゃんがレーネねーちゃんをズルズル引き擦り、有無を言わさず部屋の外へと連れて行ってしまった。それが約十分くらい前。いまだ二人は戻つてこない。なので準備してあつた朝食を冷めない内に食べようつて事になつたん

だけど、茉莉花はまだ食事に手を付けようとはしない。

「けど」「が」がもわからない。何で茉莉花達がここにいるのか
もわからない。お母さんやお父さんはどこにいるの？それにレーネ
さんは茉莉花のメイドって言つてたけどひょいぴりこわいよ……」

さつきと同じ俯いたまま呟いた言葉には、不安とか恐怖とか混乱
以外の感情が乗ってる気がする。

「うーん……だとしてもエティねーちゃんよりは友達になりやすそう
に思つたけどなあ。

まあ、さつき宥めるときに聞いた話じゃあ、茉莉花曰く初対面の
挨拶がどうも駄目だつたらしい。

なんでも

「私はエイリーネ・アトロポス。呼ぶときはリーネで良い。今日か
らお前のメイドだ。それでお前の名は？」

と、なんとも男前な。本人に曰く茉莉花に分かりやすく質問しただけのことらしいが、確かに朝起きて混乱している最中に、威圧感たっぷりに見下ろされて言われば俺でも怖い。茉莉花なら泣くね。てか泣いてたか。

ふと茉莉花を見ると俯いた肩ブルブルが震えている。やっぱ話戻
さないと。

「ま、茉莉花の言う通り確かに分かんない事だらけだけどオレ達。

でも、でもさ朝ご飯はきちっと食べなさいって、母ちゃん言つてただろ？だからとりあえず食べようぜ」

少し焦りながら捲くし立てた言葉に自分でも納得する。

そうだよ『母ちゃん』言つてたしな。それにこいつ言つておけば大抵茉莉花は言うことを聞く。まあ、オレもだけど。

第一食べなきゃ元気もでないじやん。本当は茉莉花だつて腹減つてるくせになんで意地張るかなあ。

「お父さんは、知らない人から物を貰つちゃ駄目だつて言つてたもん……」

茉莉花の反撃は予想外だ。父ちゃんか、どうだつたかな……。

あー？ 確かに言つてたかも……。めんどくさいことすんなよ。父ちゃん。

「だからHティねーちゃんとレーねーちゃんだ、つて言つてただろ」「諭すように言つてみる。実際さつき自己紹介して貰つたんだから知つてる人だ。

「そんなこと茉莉花だつて知つてるけど、知らない人だよ！……」

さつきまで俯いてボソボソ呟いていた茉莉花が突然顔を上げ、キツと睨みながら怒鳴りつけてくる。なのになんて泣きそうなんだよ、めんどくせえ……。それに知つてるけど知らない人つてなんだよ。なぞなぞかよ。訳わからんねー

「なら勝手にしろよ！ ワケワカラんチンの茉莉花っ！…」

ちょっとムカついたけど別に怒鳴るつもりじゃなかつた。普段ならしない。でもなんか無性にイライラして。出た言葉が怒鳴り声だつたのは、自分でも意外だ。

ガタンッと音を立てて乱暴に椅子から立ち上がり、ベットに走り出す茉莉花。そのままの勢いでベットに飛び込み枕に顔を埋めると、我慢しようとしているのか途切れ途切れに嗚咽が聞こえてきた。たぶん茉莉花も意外だつたんだと思つ。

うちのベットじやあんな風にダイブできないなあ……と、茉莉花が泣いてる姿を見ていたくなくて、関係ないことを考えてみる。でも駄目だつた。すぐに後悔がやってくる。

また父ちゃんに怒られる……。

ズンッと気持ちが沈む。父ちゃんは茉莉花龐彌だ。

茉莉花と喧嘩してると途中まで何にも言わないくせに、俺が怒鳴つたりするとすぐに怒る。

「太陽は男なんだから、女の子に怒鳴るな」

「正義の味方は女の子にやれしこだろ?」

「妹がいる太陽には俺の気持ちは分からんつー」

とか、そんなことを言つて、すぐ茉莉花の味方する。

茉莉花を叩いたりするともつと悪い。

「これは茉莉花の痛みだつ……」

そう言って、茉莉花の代わりにグーで仕返しされる。

今回は怒鳴つて泣かしたから、お説教をされて、お尻を泣くまで

叩かれる。

いつもだったら、これ位じやそすがに泣かないのに。なんで今日
は泣くんだよ。ちくしょーつ……

あ、でも、茉莉花が父ちゃんに内緒にしてくれれば……

茉莉花 > 母ちゃん > 父ちゃん > オレ

駄目だ、父ちゃんには言わなくとも、母ちゃんには絶対告げ口さ
れる。

思い浮かんだ告げロルートに絶望感が募る。

やだなあ……

家帰りたくねえ……

もう、父ちゃんに怒られる未来は半ば確信しつつも、とりあえず
茉莉花に謝るだけはして置いとつと決意完了し、息を吸い込む。

「ま」

「トンツ、トンツ」

唐突にドアをノックする音が部屋に響く。

「は、はいっつ」

び、びっくりした。

タイミングが良すぎてかなり驚きつつも反射的に返事をする。

「太陽様、茉莉花様、アリウス・ヨハン・メンデル司祭をお連れしました。お部屋に入つてもよろしいでしょうか？」

ドアの向こうからエティねーちゃんの声が聞こえる。誰か連れてきたみたいだ。

チラッと茉莉花の様子を伺う。依然茉莉花の嗚咽は続いてる。当分泣きやまねえなあ。

ていうか、いつまでも泣いてる茉莉花が悪いんだし。もういいや。

「う、うん。いいよ」

色々と考えるのが面倒くさくなつて、とりあえず返事をする。

けど、何も知らなかつたオレは後悔した。この後泣きながら後悔したんだ。

部屋に入ってきたのは三人。エティねーちゃん、レーねーちゃん、それから白と金色のなんかすごい服を着たにーちゃんが入ってきた。なんとなく優しそうな笑顔と茶色のふわふわな髪が、従兄弟の司にーちゃんを思い出させる。

パタンと静かにエティねーちゃんがドアを閉める音が響く。その音と共に部屋の雰囲気がにーちゃんの柔らかい笑顔みたいな温かいものに変わった気がした。

三人はレーねーちゃんとエティねーちゃんがドアの近くに残り、初めて見るにーちゃんが一人でゆっくりと近づいてくる。でも不思議と警戒心は湧かなかつた。

「おはよー！」といいます。ファシュシユース様。私はアリウス・ヨハン・メンデル。本日から貴方がたの教師をさせて頂くこととなりました。」

呆けるように見つめるオレの机を挟んだ向かい立ち、にーちゃんが笑顔と共に自己紹介してくれた。

しかし聞き逃してはいけない一言で、ぼうっとしていた頭が復活を果たす。

ありうすよはんめーてる？ うん、そこはまあいいや。
んで教師…………てことは先生かつ。うわっ、勉強かあ、面倒くさあ。

いきなり先生が出てきたことも疑問だが、このにーちゃんがアリウス先生だという事実が重要だ。

「そのことで『』説明をさせて頂きたく、参つたのですが、シャスアーシコース様は…………」

なにかを説明に来たというアリウス先生は、言葉の途中で視線を茉莉花に向ける。

つられる様にベットで顔を伏せる茉莉花を見やる。うん、まだ泣いてるんだよなー

「茉莉花。アリウス先生來たぞ。いいかげん泣いてないで」
「いよ。」

アリウス先生が少し困った顔をしていたので、とりあえず茉莉花に声を掛けてみる。

「泣いてないもん。怒ってるだけだもんっ！」

と、怒鳴り返してきたが、茉莉花が「」に来る気配はない。うわあ、当分機嫌直んないかも。

それでも呼び寄せる手段は無いわけじゃない。オレもやられると嫌だから本当は言いたくないけど。

茉莉花の奴しょ「つがないなあ。

「いーよ、わかつたから」
「いや、『母ちゃん』もつと怒るわ」

「」

『母ちゃん』と聞いて、ビクリッと体を震わせると、ああ、だの、うう、だの泣りながらも茉莉花がベットから降りてくる。

茉莉花も母ちゃん怖いからな。ちなみに父ちゃんも怖いつて言ってたから、家では母ちゃんが最強だ。

ズルズルと音が鳴りそうな様子で歩いてきた茉莉花は、一瞬迷う仕草を見せてからオレの隣に座つた。さつき喧嘩したばかりなあ。茉莉花の気持ちは分かるが、アリウス先生が正面に立つ以上最初から選択肢は無い。

チラッと隣の様子を伺うと茉莉花は泣き腫らした目周りが気になるのか、ゴシゴシと擦つている。

茉莉花のことだから泣き顔のままは嫌だろ?と思つて一応しぶらく待つてみる。

けれど様子が一向に変わらないので、構わず自己紹介を開始してみる。

「えつと一見太陽です。三上第三小学校三年一組。昨日で9歳になりました。それでこつちが……」

そう言つて茉莉花を視線で促す。けど返ってきたのは非難がましい視線だ。

なんとなく茉莉花が

なんで急に始めるの…?

と、言つてる気がしたのから、こつちも

茉莉花が悪いじやん。

と、田で訴えてみる。

茉莉花もなんとなく分かつたのか、諦めたよつて言葉を引き継ぐ。

「……一見茉莉花です。三上第三小学校三年一組です。」

朝から泣いたり、怒鳴つたりしたから、茉莉花の声は少しかすれ気味だ。

「太陽、茉莉花が、お名前で、一見が家名ですね？」

アリウス先生が確認するように聞いてきたので、質問の意図は分からぬがとりあえず頷いておく。

「それでは茉莉花様も来て頂いたので、改めてご挨拶させていただきますね。私はアリウス・ヨハン・メンデル。本日から貴方がたの教師をさせて頂くこととなりました。本日の用件はお一人にご挨拶と、この国に来て頂いた訳、これからのお二人の立場を説明をさせて頂くため参りました」

『IJの国?』

茉莉花と疑問の声が重なる。

日本じゃない?

外国?

チラリと横目で隣を見る。茉莉花は今にも泣きそうなほど顔色が悪い。さらに不安が大きくなる。

「はい、この国はアナトリア。この国は國教であるアナトリア創造神教から由来した名です。」

アナトリア?

もしかしたら、と思い無言で茉莉花と視線を合わす。

知らない。初めて聞いた。

そう言つのように茉莉花は涙目で首を小さく横に振る。

「このアナトリア創造神教では、ラーヌ、ファムリス、シャクリスの三神を創世の神とし、信仰の対象としています。またこの三神は一人ずつ神徒と呼ばれる存在を召喚し、己が御遣いとしています。」

アリウス先生の話は分からぬ言葉ばかりなので理解できない。だけど一つ聞いた事のある言葉が出てくる。召喚。神様が召喚？召喚って、ゲームで出てくるあの『しじうかん』の事なのか？嫌な予感、嫌な空気が広がり続ける中で、アリウス先生の言葉だけが淀む事を知らずに進む。

「すなわちラーヌソレル、ファシュシユース、シャスマーシユース」

ファシュなんとかはオレ、シャスなんとかは茉莉花、二人を呼ぶ時にねーちゃん達が使ってた言葉だ……

「もうお察しのこととは思いますが、太陽様が第52代のファシュシユースとして、茉莉花様が第44代のシャスマーシユースとしてこの世界に召喚されました。」

ドクンッと体全体に心臓の鼓動が響く。
途中から嫌な予感はあつたんだ。

たつた一言が心に刺さる。

『…………「」の世界?』

体から絞り出したような一人の声が、再び重なる。

その声を聞きハツとした表情でアリウス先生の表情が固まる。

「…………そうです。この世界です。ご確認させていただきますが、お一人はチキュウと言われる世界にいらっしゃいましたね?」

キキタクナイ

頷く。

キキタクナイ

これからアリウス先生がなにを言つのか頭では分かつてゐる。

キキタクナイ

「この世界の名はミルアーラ。お一人のいらっしゃった世界とは異なる世界になります」

頭の中が白に、ただ真つ白になる。

もう何も考えられな

「お、お家に帰れないの?」

ヤメロ、マリカ

茉莉花が震える声でアリウス先生に問う。

「……はい。お一人には神徒として、この世界で生きていただきます」

その答えを聞くまでが限界だった。頭の中の何かががずれる。オレも茉莉花も溢れて来る涙と嗚咽が止まらない。

その様子を見てこれ以上の説明を断念したのか、アリウス先生は悲しそうな表情をその顔に滲ませる。

「本日はここまでにしましょう。また明日伺います。……………
申し訳ありませんでした」

と、一言残しアリウス先生は部屋から出て行つた。

その後のことはあまり覚えてない。

ただ茉莉花と一緒に泣いた。

もう母ちゃんや父ちゃんに会えないのが悲しかった。

もう友達に会えないのが悲しかった。

もう家に帰れないのが悲しかった。

会いたくないなんて思ったことを、父ちゃんに謝りたかった。

家に帰りたくないなんて思つたことを、母ちゃんに謝りたかった。

お互いの存在を確かめるように抱き合ひて泣いた。

泣きつかれて眠るまで泣いた。

意識が無くなるまで夢であることを願つて泣いた。

2008年 10月24日

創世暦2991年 風の月 13日

神に愛され、世界に捨てられた日。

世界は闇だけがあつた

ある時、闇より生まれし三神現る。そこを天とした。

男神ラーヌ、己が体を天より落とす。そこを大地とした。

体を無くした男神ラーヌを嘆き、女神ファムリスは涙を流した。
それは海となつた。

体を無くした男神ラーヌを嘆き、女神シャクリスは髪を切つた。
それは命となつた。

やがて海より生まれし命、新たな男神ラーヌの体となり、天に帰
る。それは太陽となつた。

それを見届けた女神ファムリス、世界を雲で覆い女神シャクリス
と共に月になつた。

それを見届けた女神シャクリス、女神ファムリスと共に月になる。
最後の息吹、風となり雲を掃つた。

天に輝く三神、世界を遍く照らす創世の光となる。

「結構です。それでは授業を始めましょう」

今日もアリウス先生の授業が始まる。授業の始まりは決まって創世神話の暗唱からだ。

この世界に来てもう四十日近く過ぎた。あの日が風の月13日、今日が光の月11日。ミルアーラでは一年が九ヶ月だから、オレらがこの世界に来てそろそろ一ヶ月が過ぎるみたいだ。最初の一週間はオレも茉莉花も出された食事を機械的に食べ、延々と泣き続け、疲れたら夢である事を願つて眠る。そんな生活を繰り返していくけど、何度も田代でも変わらない世界に絶望と共にこれが現実なんだと実感した。だけど納得できた訳じゃない。今でも母ちゃんや父ちゃんの事を考えると涙が出てくる。なにせ今も涙が出てきそうだ。僅かに滲んだ涙を右腕でゴシゴシと擦り付ける様に乱暴に拭う。授業中に泣いたりしたらすぐ恥ずかしいし、なによりかつて悪い。別に咎められた訳じゃないけど、妙に恥ずかしさもあって気付かれていないか隣に座る茉莉花をそつと窺う。

茉莉花は相変わらず真面目なんだなあ。

背筋を伸ばし前を向きオレらに難しい説明をするアリウス先生の話を熱心に聞く姿はこの世界に来てから初めて知ったことだ。そう茉莉花はいつも授業を真面目に聞いてる。今も、といふかいつもアリウス先生が教えてくれるのは神学という授業で、この世界の神様の話らしいが、はつきり言つてつまらない。それ以外には文字の読み書きもやっているけど、まだ自分の名前が書けるようになつただけだ。アリウス先生の授業は体育が無いのがすゞしく寂しい

「太陽様、聞いていらっしゃいますか？」

「「」よあつつー。」

び、びっくりして変な声でた。唐突に声を掛けられたことで心臓がバクバクしている。

ま、まずい。アリウス先生、なんかジッと見てるしい。違つ意味でバクバクしてる氣がする。

普段は夏の木々の葉を思わせる様なアリウス先生の優しい色の瞳が、やけに冷たい無機質な縁に見える。

本能的に感じた恐怖に動かされるまま、視線から逃げるよつて頭を下げ謝つてみる。

「「」めんなさい。聞いてなかつた。……です」

やけに動く心臓の音が気になつて仕方ない。下げる頭には射す様な視線を感じるままだ。

「「」怖くて頭上げられない」

長いよう短い時間が過ぎ、アリウス先生も満足したのか、雰囲気が変わり部屋の空気も柔らかくなる。

「それでは始めからお話するので、今度は聞いていてくださいね」

その言葉でよつやく頭を上げ、ブンブンと音が鳴りそうなほど勢いで首を縦に振る。

「今日は以前より先延ばししていました、アナトリア創造神教内ひいてはこの国でのお一人の立場を」説明しましょう

今度は聞き逃さない。というか色々大事なものが懸かつてゐる気がする。

「初めてお会いしたときにお伝えしましたが、お一人は神によつて召喚された存在です。太陽様はファムリスに、茉莉花様はシャクリスにそれぞれの神に選ばれました」

二人で頷く。

忘れるわけがない。神様が勝手に選んで無理やり連れて來たんだから。

「そして神に選ばれ、この地に召喚された際にお一人はそれぞれ神の力が授けられています」

おお、やっぱりオレ勇者になるのかつ！

「まず太陽様には先見と呼ばれる力が授けられています。この力は未来を予知する力です。」

未来が分かる力ってこと? ていうことは

「ハイツー!」

勢い良く元気に手を擧げる。

ただ突然手を擧げたから、茉莉花は驚いたみたいで「い睨んでくる。

「どうぞ、太陽様」

「それってテストの問題が受ける前から分かつたり、明日の晩御飯が分かつたりする力つて事！？」

「ば、馬鹿あ」

そう言ってなんか茉莉花は恥ずかしそうに俯むく。良いじやんか、ちょっとくらいはしゃいだつて！

「そうですね。そのような目的で力の使用されたという前例は歴史上ありませんが、能力的に見れば可能だと思います。」

オレすげー

勇者太陽は先見の能力を手に入れた！！
決意完了だぜい！！

「ただし太陽様の力は意識的に使うことが難しく、主に寝ている間に夢として現れることが多いようです。さらに予知する内容が災害、もしくは歴史的な事柄に関することが多い事から、この力は夢見、神託などと呼称されることもあります。これらを理由に太陽様はこの国の守護者という立場にあります」

「ええーー」

おもわず口に出る。
だつてようするに自分で使えないって事だろー？
なんかガッカリだ。

「はい」

今まで静かに聞いていた茉莉花がスッと手を挙げる。

「どうぞ、茉莉花様」

「太陽の力は難しいって言ってたけど、そつ言ひひて事は逆に茉莉花の力は自分で使い易いって事、ですか？」

「『明察です。茉莉花様には祝福と呼ばれる力が授けられています。この力は他者に力を分け与える事ができます』

「力を与えるとどうなる、なんですか？」

「確認されているのは自己治癒能力の向上、身体能力の向上、中には感情の増幅があったのではないかと見られる例もあります。この能力は汎用性が高いので、未だ発見されていない使い方が有るかも知れません」

「えっと、それじゃあ茉莉花の立場つていつのは？」

「まず先ほど『』説明した通りこの能力は祝福という名で呼ばれ、実際にも『与える』ですから神の力として一般にも広く受け入れられている事と、次にシャクリスは美の女神としても有名で、尚且つその神徒は歴史上全て美しい女性であることから、信仰の象徴ひいてはこの国の象徴といふ立場にあります」

茉莉花の顔がちょっとだけ赤い。
いつもまえに照れてるなつ！」

「じゃあ、茉莉花で『美しい女性』つていうのも終わっちゃうなー！」

キッと茉莉花が睨んでくる。

でもそれだけで言葉ではなくこも言つてしまはない。

「ヒヒッ！」

多分アリウス先生がいるから我慢しててんだな。
よーし。それならもう一回言つてや

「大丈夫ですよ。茉莉花様は必ず美しい女性になられます。私が保
証しますよ」

アリウス先生がいつもの穏やかな笑顔で断言する。
茉莉花の顔がトマトみたいに顔中真っ赤だ。

やるなあ、アリウス先生。

トマトだった茉莉花の顔も少し落ち着いたみたいだ。
でもスーサー、スーサーと鼻息荒くしている茉莉花はちょっとびり
アホな子だ。

そんなこと思つていたら、また睨まれた。
声にしてないんだから気付くなよ……

「簡単に使えそうな茉莉花は良いよな。せつか魔法使いになれたと思つたのにオレのは自分で使えないんだぜ」

茉莉花の視線を受け流しつつ誤魔化し半分、やっかみ半分の愚痴
をこぼす。

正義の味方になる事が第一だけど、魔法は使えた方がかつていい
よなあー

「マホーツカイですか？ それは神の力を行使することのできる者、
ということでしょうか？」

と、アリウス先生が聞いてくる。アリウス先生は割と知りたがり
の聞きたがりだ。

「えっと、魔法っていうのは不思議な力で、何も無いところから火
を出したり水を出したりする力、かな？」

ゲームの世界を思い出してつつ説明するも、改めて考えると曖昧な
イメージしか湧かない。

とりあえず、ブアアーッとかドーーーンとかそんな感じだよなあ？

「あと変身したり、道具を出したりすることもできるよね」

何かを思い出し、ウキウキと楽しそうに茉莉花が俺の説明に付けてす。でも、茉莉花が言っているのはひらひらの変な服に着替えたり、弱そうなピンクの杖出したりするだけのやつだ。

あんなのと勇者インサイダーの変身を一緒にするなっ！…。

「なるほど、それでしたら在りますよ！」の世界にも

「あ、あるのおおー？」

「ほ、本当にいいー！」

あつさりと言ったアリウス先生の言葉に一人で吃驚したけど、茉莉花はそれ以上に嬉しそうだ。

また鼻息荒くなってるし……

アホな子になるからやめとけってそれは。

「ええ、想化、正式には空想具現化能力と言いますが、先ほど言わしたことなら幾つかできます。と言いますか、お一人が持つ神の力はこの想化の原点に当たります。」

「た、例えばどんなことができる、んですか？」

意気込んで質問をした茉莉花は答えが待ちきれないのか、机から身を乗り出して聞いている。

「こ」の能力で一般に可能だと確認されているのは水、風、火を使った想化です。所詮は人の力なので限度はもちろん有りますが、小さな火を焚く事から突風を起こすことまでと用途は様々です

アリウス先生の説明の途中から、プシューと空気が抜けしほんでいくみたいに茉莉花がガツカリしている。ため息からも何かが出ていつている様にみえて、ちょっとだけ可哀相になる。誕生日のプレゼントは魔法のなんとかステッキだから、きっと変身したかつたんだろうなあ……

ちなみにオレは勇者インサイダーのインサイダーブレードだ！！

「しかし本来の想化は全部で九つの力に分かれていると言われています」

「あれ？ でもさつまは三つでアリウス先生が言つたじゃん」

茉莉花も立ち直ったのか、隣で「クククと頷いてる。

「そうです。人が使える想化が三つ。ですが正確には、神が起こした九つの奇跡、その内三つを人が模倣した力が想化と言われる力です」

なんか難しくなってきなあ。とりあえず九つある神様の力を三つだけ真似したことだよなあ？

「お二人の力にも関係のあることですからもう少し詳しく説明します。まず簡易ではありますが創世神話は覚えていらっしゃいますね。いつもお二人に暗唱していただいているものです。そしてこれに沿つて神の奇跡は九つとされ、想化の力も分類されていますが、実は日常的にこの分類は使われています。お分かりになりますか？」

アリウス先生の質問を考える努力は一応してみる。

うーん、うーん？ うん。わかんねえっ！

でもこりこり時は大抵

「……月の名前？」

茉莉花の声は小さくて自信なさげだ。でも茉莉花は合ってると思つた時しか答えないから実は自信満々だ。

「その通り、正解です。」

「一年を九ヶ月に分けた理由もここにあるのですが、闇、天、大地、海、命、太陽、雲、風、光の九つが、そのまま想化の力の分類としても考えられています」

「その中で闇、天、光は神のみが使える力と言われていますが、大地、雲、命は神徒つまりお一人も使える力もあります。太陽様が雲。茉莉花様が命といった具合です。そして余つた三つ海、太陽、風が我々の使える力に当たります。」

アリウス先生の話を考えてみる。要するにさつき言つてたオレの力が雲で、茉莉花の力が命つて事だろ。んで他にも使える力が有りますよつてことじゃね？

「じゃ、じゃあさ、オレもその力が使えるのかなあ？」

「もちろんです。太陽様はファムリスの神徒ですので海の想化、茉莉花様はシャクリスの神徒ですから風の想化が特に使えるようになります」

よつしゃあああ！

これでオレも魔法使いだつ！！

「お望みでしたら想化の使い方もお教えしますか？」

『ハイツ！！』

アリウス先生の言葉に茉莉花と声が合わせる。

なんだかんだいって、さっきまで沈んでいたのに茉莉花は嬉しそうに笑ってる。でもオレも顔がにやけてしまうがないからお相子だ。

ヤバイ、今日寝れないかもオレ……

ちなみに神学の時間が減つて嬉しかったことは、アリウス先生には絶対に秘密だ。

6：繋がる思い、伝わる思い

10月24日 風の月13日

忘れられない。茉莉花たちの誕生日の次の日。

そしてミルアーラに来た最初の日。

あれから何日が経つたのか分からぬ。けど、季節は秋から冷たい風が吹く冬へと変わり、この国ではもうすぐ新しい年を迎えるとしている。思い出す。日本で過ごした今年の元旦はいつも通り人ごみを嫌う太陽を、お父さんが無理にあちこちへ連れまわし、結局二人ともくたくたになりながらも、翼伯父さんや従兄弟の司くんが住む月ノ富神社に辿り着き、先に行つて待っていたお母さんと茉莉花に合流。最後は家族揃つて初詣をした。

特別じやない普通の光景が心を締め付ける。

お父さんが太陽に無理やり抱きつき、人ごみの中ではしゃぐ一人の姿が。

その姿を苦笑いしながらも、茉莉花の手を握り優しく見守るお母さんの姿が。

心がズキズキと痛む。思い出すだけでも痛いのにどうしてもそれに縋つてしまつ。

いつでも手に届く場所にあつたその光景に、来年も再来年もこの先ずつと触れる事は無い。そう家族が揃つて元旦を過ごすこと。ううん。家族が揃うこと無い。

もう、どうしようもない」とは頭では分かつてゐるの。でもやっぱり寂しい。

お家に帰りたい。

お料理のお手伝いをしながら、お母さんとおしゃべりがしたい。
もう嫌がつたりしないから、お父さんにギュッとしてほしい。

もうこんな世界に居たくない。

アリウス先生が言つていたこの国での役割も茉莉花にとってはどうでもいい。

神様が連れてきたつてアリウス先生は言つてた。でもなんで茉莉花なの？

こんなこと茉莉花じゃなくたつて誰だつてできるよ。きっと。それに神様は連れて来れたんだから、帰してくれることだつて

「コン、コン、コツコン、コン、コツコン」

どこまでも沈んでいつてしまいそうな感情が、唐突に響くおかしなリズムのノックで止められる。

というかまだ続いてる。こんなことするアホな子は一人しか知らない。

「おーい、茉莉花、いねーのかあ？」

ドアの向こうから聞き慣れた声が聞こえる。やっぱり太陽だ。それに未だ鳴り続てるノックは、太陽の見てたアニメの曲だ。

「ねえ、茉莉花居ないっぽいんだけど？」

なんとなく気分が滅入つて返事をしないでいると、太陽は茉莉花がないと思ったみたいだ。

ドアの向こうで太陽は誰かと話してる。たぶんレー・ネさんかな。

「いや、そんなことは無い筈だが…………強行突破するか？」

「い、いるよおひーーー！」

一言でレー・ネさんだと分かるその言葉に危ない空氣を感じ、急いで返事をする。

レー・ネさんは「冗談を言わない。言つた」とは必ずやる人だ。

「なーんだ。いるじやん。茉莉花、入るぞーーー！」

太陽は返事も聞かずに入つてくる。

それじゃあ、結局は強行突破すると一緒にじゃない？

「はよー、茉莉花。それでさ知ってるか！？ セツキエテイネーちゃんに聞いたんだけど、なんか明後日に新年祭とかいうお祭りがあるらしいじゃん！ーーー！」

部屋に入つてきて挨拶もそこセツキ、太陽は一気に捲くし立てる。

「おはよう太陽。」こんなに朝早くからどうしたの？

「だからお祭りだつて。お・ま・つ・り。茉莉花寝ぼけてんのか？」

確かに、茉莉花もレー・ネさんからいついう祭りがあるつていうのは聞いたけど。

「知つてゐよ。けど、それがどうしたの？」

「そんなん決まつてゐじやん。遊びに行くんだよお祭りにーーー！」

茉莉花たちは双子だから相手の考えていることが結構分かる。

だけど太陽は何も考えないで会話したり行動するから、偶に分からない。

今も興奮して話す太陽は、きっと何も考えないで話してる。

「たいよお、鼻息荒くして話すとすゞこアホな子に限るよ……

「なんだよ、なんか文句あんのかよつー」

太陽に考えていたことが伝わったのか、少し言葉を荒くして聞いてくる。

「……だつて、太陽氣付いてないの？ 茉莉花たち一度もこのお屋敷から出してもらつてないんだよ」

「」のお屋敷はお庭も含めてかなり広い。だからお外で遊ぶ事だってできるけど、お庭にあるとつても高い壙の向こうには一度も行った事が無い。

「だから遊びに行くんじゃん。茉莉花はアホな子だなあー」

やつぱり分かつてない。アホな子はそつちだよつー！

だつてこのお屋敷は、茉莉花たちが出れないんじゃなくて、茉莉花たちを出さないよつこしてるんだよ。

「……やつぱり無理だよ。そんな簡単にお屋敷から出してくれないよお……」

どうせ茉莉花たちはこの世界から逃げられない。
「」のお屋敷すらも逃げられない。

太陽が来るまであつた暗い気持ちが頭をもたげる。

「なにをそんなに心配してるか知らないけどさ、絶対大丈夫だつて」

「だつてオレと茉莉花とエティねーちゃんにレーねーちゃん、ついでにアリウス先生だつているんだぜ、だから平氣だつて！！」

「うそっ！！

もう三人から良いつて言われたの！？

太陽の言葉で沈んでいた気持ちが一気に浮かび上がる。

「あの、レーさん。その、行つても良い、んですか！？」

ドキドキしながら訊ねる。

しかし聞かれたレーさんは申し訳なさそうに顔を歪がめている。

「すまない。今、初めて私も聞いたんだが？」

「えつ…………？」

しばらく呆然とする。

一瞬とはいえ期待もした。

本当は茉莉花だつて外に出たいと思つてたつ！！

そう、だからこそ許せない。

太陽に対する怒りが沸々と湧きあがる。

裏切られたと思つ気持ちが膨れあがる。

「なんで？ なんで太陽はいつもいつも何にも考へないで行動するの！？」

涙が出てくる。

そうだちよつと考へれば分かつたのに。

太陽はさつきエティさんから聞いたつて言つてたのに。

その後たとえエティさんやレーネさんに直ぐ許可を貰えたつて、

アリウス先生には無理だ！！

だつて茉莉花も太陽も今日はまだアリウス先生に会つてない！！！

一瞬でも期待したのが馬鹿だつた。

アリウス先生はもちろん、レーネさんにすら確認しないで勝手に決め付ける太陽が信じられない。

「いきなりなんで怒つてるんだよ？」

まだ太陽は分かつてない。

なんで？ なんで？ そのくらい気付いてよ！！

「なんで？ なんで分からないの？ だつて茉莉花と太陽はアナトリアの象徴と守護者なんだよ！ それでも、もしかしたらエティさんとレーネさんは良いつて言うかもしね。けど、アリウス先生が簡単に良いつて言つわけないよつ！！」

溢れてくる感情が止まらない。

太陽を責める言葉が次々に浮かんでくる。

「茉莉花、それ以上は言わなくて良い。分かつていてるから」

「茉莉花たちはもう言いつと茉莉花のことを抱きしめて頭を何度も撫でてくれる。

なんだかお母さんに抱きしめて貰つて『安心する』けど、そうしたら余計に涙が止まなくなつた。

「なんだよ。そのことかよ。だから三人とも大丈夫だつて、最初から言つてるじゃん」

茉莉花たちは双子だ。だから相手のこととは結構分かる。
そういう風に茉莉花は思つてたのにっ！

なんで太陽は根拠も無いくせにそんな勝手なことを言いつの！？
こんなに言つても茉莉花の気持ちが分からぬの？

「太陽。もう良い。それ以上は何も喋るなつ」

もうなにも言えない茉莉花の代わりにレーネさんが太陽に言つてくれた。

その優しさに甘えたくて茉莉花から強く抱きつく。

太陽よりも、よっぽどレーネさんの方が茉莉花のことを分かつてくれる……

「なんだよ一人して。オレは何度も大丈夫だつて言つてるのに」

太陽のその言葉にブツンつて頭の中で何かが鳴つた気がした。
レーネさんの腕から抜け出し、爆発しそうな感情を込めて太陽を睨みつける。

「太陽はなんでそんなに自信満々で言い切れるの？！ いつもみた
いにどうせ理由なんて無いんでしょ。それならもう勝手なことは言
わないでよっつ！！」

最後は叫ぶよつこ言い放つ。

もう顔も見たくない。
すぐにでもここから出て行ってほしい。

「そこまで言われるとさすがにムカつくけど、夢で見たんだから絶
対だろ？ だつて神様の力だぜ」

「…………」
「…………」
「…………」
「え？」

時間も体も感情も全部止まつた気がした。

初めて見るアナトリアの町は、建物も、道行く人も、何もかもが新鮮に映る。

それに今日は新年祭が行われているので、町全体がキラキラと輝きとても華やかだ。

結局あの後アリウス先生の授業で聞いてみたら

「こちらでもちょうどお話しようかと思つていたのですが、実はお二人が召喚された事実はまだ公表されていません。しかしお二人がこの世界に来てから早二ヶ月。そろそろ今後の対応を国としても、創造神教としても決めなくてはいけません。そこでこの度の新年祭で行われる祭事に参加していただき、そこに参加される陛下並び大司教に秘密裏にですが面通しをして頂きます。」

と、びっくりする展開ですんなり話が進んだ。

そして今は大神殿へと続くこの大通りを五人で進んでいる。
今日は馬車も通れない程の人が溢れかえっているので、全員徒歩だ。

太陽はお屋敷を出てからずっと、アナトリアの町並みの物珍しさの為かキヨロキヨロと首を動かし、直ぐにでも人ごみの中に飛び込んでしまいそうだった。

なので今は茉莉花と手を繋ぎ歩いている。

太陽はさつきから何度も人にぶつかりそうになるから、見ていてとても危なっかしい……

繫いだ右手が前後左右へと慌しく引っ張られる中、ふと疑問に思つたことを口にする。

「ねえ、そういうえば太陽ってどうしてそんなに新年祭に行きたかったの？」

今日は物珍しさもあつてなのか大丈夫そうだけど、太陽は人ごみがあまり好きじゃない。

だから余計に不思議に思う。

太陽も町で遊びたかったのかなあ？

「だつて元旦は……『みんな』で初詣に行かないと一年の始まりつて感じがしないだろっ！」

繫いだ右手がギュッと握られる。

それ以上太陽は前を向いたまま何も言わない。

だから太陽の左手をギュッと何も言わずに握り返す。

茉莉花たちは双子だからきっと伝わってるね。

何も言わずに歩く。

『家族』で一緒に初詣に行けたね。たいよお……
ありがとう。太陽が一緒に本当に良かつた。今年も

去年の終わり、初めて先見の力を使ったあの日。あの先見はオレたちがお祭りに行くことを先見したんじゃなくて、王様と大司祭のじいちゃんに会つことについて先見したんじゃないかつて、アリウス先生は言つてた。

だけど、オレはお祭りに行くことしか覚えてなかつたんだ。

というか、朝起きて見た夢がなんとなく先見だと感じたオレは、エティねーちゃんに新年祭の話を確認し、すぐに茉莉花の部屋に突撃したから、正直『遊びに行く先見を見た』としか分からなかつたんだ。

そうだよ、初めてだつたんだからしうがないうがないうじん。

あつ、『ごめんなさい』。オレがわるかつたよね。

だから、だからもう許してよ、アリウス先生

「ダアアアアアア」

もう駄目だ！ もう無理だ！

出した奇声と一緒に心中のなにかを吐き出し、逃げ出したい気持ちをグッと堪える。そして少し落ち着いた心で、手元にある自

分で書いた日記に視線を落とす。そこには時に激しく、時に穏やかに、微妙に震えた線が、ある種の芸術性を持つて描かれている。

「なんて書いてあるんだ?」

自分で書いた文字なのに、なんて書いたかワケワカラんチンだ。
もとより字は上手い方ではないけれど、これはちょっと……

まあ夢の内容なんか毎日まともに覚えてないし、実際に今朝の夢
だって全然覚え……て……な……い。くわう

意外と自分に嘘を付くのが難しいことを痛感する。割と覚えてい
る自分が恨めしい。

そうだよつ。覚えてるよ。だって今日の夢は、書き取り練習を延
々と繰り返すゆめ……

内容を思い出し血の気が引いていくのが分かる。

だ、だけどあの悪夢は絶対に先見じやないつ。だって、だって書
き取り練習したのは昨日のことだつー。

もはや夢なのか記憶なのか分からぬ光景を思い出し、背筋に一
筋の汗が流れる。

ま、まざこよ。危機感が否応無く募る。

いのままアリウス先生に日記を渡したら、あの夢が先見だつと
記憶だつと関係なく来る未来は、いつし

「ニヤアアアアアア」

もう何度もか分からぬ奇声を発しつつ、原因となつた一週間前

の出来事を思い出す。

年が明けて一週間も経った頃、アリウス先生が一冊の日記帳を持ってきた。

「明日より、起床されましら」ひらひらと夢で見た内容を記入して頂きます。」

そう言つてアリウス先生はオレの前に日記帳を差し出してきた。

「んあ？」

その日のアリウス先生の授業も終わり、晩御飯の内容に思いを馳せていた所だったので少し反応が遅れたけど、生返事をしつつアリウス先生の手から日記帳を受け取る。

「夢で見たこと？」

アリウス先生の言つている意味が理解できず、とりあえず聞き返してみる。

「そうです。先日太陽様が先見を使われた際、時間の経過と共にその記憶が曖昧になられたと仰っていましたので、太陽様の見る夢が先見であるのか否か判断するためにも記録を付ける事になりました」

「毎日？」

「はい。毎日お願ひします」

めんべくやー

エティねーちゃんか茉莉花にでも頼もつかなあ。

「なお、見た夢に因りますが、場合によっては国家機密にも関わる
ことになりますので、太陽様御自身で書かれますよつお願いします」

まるで心を読んだように、アリウス先生が釘を刺していく。

「わっ、ほんとに面倒だなあ、えりしょつかなあ、夏休みの絵日
記じやないんだか

「それと問題ないとは思いますが、先ほどお伝えしたとおりにかう
で内容を確認させて頂きますので、アナシウス語でお願いしますか」

「あ? うん?」

考え事をしてた所為で、気の無い返事になりつつも、せつげなく
伝えられた内容を頭の中で咀嚼する。

「…………む、むつ無理無理むつムツッ……」

「大丈夫ですよ。太陽様でしたらでもあります。書けるだけの勉強をお
やりになつたのですから」

「いやいやいや、ちゃんとやつしたのは茉莉花だけだよー

とは口が裂けても言えなかつた。んじゃ、言わしても「うん」なかつ
た。だってアリウス先生の笑顔が眩しい。アリウス先生の笑顔が母
ちゃんの笑顔と重なる。あれは逆らつちゃいけないと、本能が敏感

に空氣を読む。

「ハイ……」

あらゆる感情を飲み込み、体から搾り出すよつと言えたのはたつた一言だけだつた。

あの後、茉莉花だつて、「茉莉花も無理だと思つ」つて言つてた。それでも一週間オレは頑張つたと思つ。

弱音はいっぱい吐いた。それでも挫けなかつた。奇声もいっぱい出した。それでも挫けなかつた。

でも一言、いや、いっぱいアリウス先生には言いたい。

この世界に来てまだ半年すら過ぎてないのに、どうしたら文字が書けるようになるんだよ。いくら神様の力で言葉が通じてるつて言つたつて、文字は自分で覚えなくちゃいけないんだぜ。そりやあ、アリウス先生なら何とかなるかもしれないけどオレは「見太陽だよ。無理無理できないつて、なのに毎日毎日書き取り書き取りもう腕が痛いつて。もう良いじゃん。オレ、アリウス先生が来るまで夢のこと覚えとくからさ、それを口で言つからアリウス先生が書いてよ。そつしたらもう文字のれんし

「トンシ、トンシ」
「いいつ」

ノックの音は静かだつたにも関わらず、直前まで考えていたこと

がアレだつたので思わず息を呑む。

「太陽様。アリウス司祭がお着きになられました」

ドア越しにエティねーちゃんがアリウス先生の到着を告げる。

もへ、もう来たの？ 早いつて。ど、どうすんだよ。授業始まつ
ちゃうじやん。まだ全然書き終えてないのにつつ。また？ また書
き取りすんの？

いいいやああだああ

声に出して叫ぶつもりだったのに、口が思うように動かなかつた。
その代わりに聞こえてきたのはカチカチカチといつやたら軽い音だ
けで、それがやけに耳障りに感じる。

「太陽様？」

いつまでも返事の無いオレに疑問を感じたのか、エティねーちゃ
んが若干訝しがる声で聞いてくる。

ギリツ

音がなるほど奥歯をかみ締め、荒れ狂う心を無理やり一つの結論
へと収束させる。

言つてやる。今日一日も無理だつて言つてやる。
心の奥底に眠つていた勇氣を田覇めさせん。

「ああ、ソレからが眞の戦いだ！』

ガターンッと音を立て席を起ち、左から右へ右腕を真横に振りぬき、勇者インサイダー風にボーズをキメる。

こうしてオレはアリウス先生と戦うことを決意完了し、エティねーちゃんが待つ扉を開いた。

その手に殆ど書く事のできなかつた日記帳を握り締めて。

ただね

この展開がいつも通りだつていうのは、心の奥では分かつてたんだ。

まあ、予想通りだつたんだけどね。

茉莉花とアリウス先生が想化の授業をしている横で、一人黙々と今日の日記で必要となる文字の書き取り練習をする。

書き取り書き取り書き取り書き取り書き取り書き取り……

この光景なんか見たことあるなあ。

ふと概視感を覚え、うつすらと涙が滲む眼で文字を連ねる。

書き取り書き取り書き取り書き取り書き取り書き取り……

小さな文字で紙一杯に埋まつた『書き取り』の文字に、達成感と敗北感を同時に感じつつもそろりと顔を上げ、小さな声でアリウス先生に書き取り練習が終わつた事を伝える。

「アリウス先生。おわりました……」

「そうですか。それでは次に『文』字の書き取り練習をこちらの紙にお願いします」

そう言つて新たな紙をアリウス先生は差し出してくる。

受け取るために伸ばした手が、一瞬だけ躊躇する。

いい加減やつてられない、と思う気持ちが脳裏を掠める。

しかしアリウス先生と視線が合い、硬質的な目でジッと見つめられると反発しけた気持ちも瞬時に萎えた。

あの目はヤバイッ

本能どこのか理性でも紙を受け取らない今の状況に危険を感じ、アリウス先生の手から奪つよう紙を取る。

再び書き取り作業を開始する。
ひたすら機械的に作業を繰り返す。

文字文字文字文字文字文字文字……

一抹の不安が過ぎる。

次はきっと『練習』だ……

文字文字文字文字文字文字文字……

黙々と作業を繰り返すなかで心が徐々に擦り切れていく。

もう文字むりだ……

授業が始まつてからずっと繰り返される単純作業に頭が朦朧とする。

「……アリウスせんせい、おわりま……」

「それでは次に『練習』という字の　　」

「ここまでだつた。正直オレは頑張つたと思つ。
けど連日繰り返されるこの作業にとうとう我慢の限界を感じる。
アリウス先生の田はヤバイッ。そんなことは分かつてゐる。でも、
でも……」

モウゲンカイダ

今朝方の決意を思い出す。

「アリウス先生っ！！」

「太陽様、なにか？」

普段とは違い、簡潔に問い合わせてくるアリウス先生に若干萎縮しかけるが、無理やり心を奮い立たせて言葉を言い連ねる。

「この世界に来てまだ半年すら過ぎてないのに、どうしたら文字が書けるようになるんだよ。いくら神様の力で言葉が通じてるって言つたって、文字は自分で覚えなくちゃいけないんだぜ。そりやあ、アリウス先生なら何、ひいつう」

アリウス先生に文句を言つている間も、意識して視線は決して合わせないようにしていた。母ちゃんの目とイメージの重なるアリウス先生の目に心のずつと奥で恐怖があつたからだ。しかし勢いに任せ、アリウス先生を睨みつけたとたん、自分の過ちに気が付く。

「続きはありますか？」

終わった……

頭の中は敗北感で黒く染まり、アリウス先生の言葉に何も反応できず頃垂れる。

ふと父ちゃんが母ちゃんの前で正座している姿が、記憶の中から次々に浮かび上がる。

こつまでも音の無い、張り詰めた空気が否応無く緊張感を高める。

隣で事の成り行きを見ていた茉莉花も口を硬く閉ざし、アリウス先生の様子を固唾を呑んで伺っている。

「太陽様」

ビクウンツツ

アリウス先生の一言で空気が割れ、体が痙攣したように反応する。

「仰られたい事は分かりました。理解もできます。しかし日記を書く為、早急に太陽様が文字を学ばなくてはならない。この事はどうあっても事実です」

ちくしょう、次はなにを書けば良いんだよ……
自分の未来に絶望を感じつつ、結局は何も変えられなかつた状況に悔しさが募る。

「しかし今の学び方では太陽様の負担が大きいことも理解しました。ですから学び方を変えましょう」

そう言つて持つてきた荷物の中から一冊の本を取り出す。

「本日より太陽様にはこの世界の絵本を読んで頂きます」

突拍子の無いことを言い出したアリウス先生に対しても思わず声を漏らす。

「え、絵本？」

「はい。絵本です。内容はこの世界の歴史、又は創世神話に沿つたものを選ばせていただきますが、基本的に幼児を対象とした物にな

ります「

差し出された絵本を呆然と眺めながら徐々に頭が沸騰していく。

くつそお、絶対馬鹿にしてるなっ！

アリウス先生が暗に「幼稚園からやつ直してきて下やこ」と言っている気がして、かなりムカつく。

なんか、なんか言わねえとムカつこうしちゃうが

チヨン、チヨン

沸騰した頭が爆発寸前だったその時、隣に座る茉莉花がアリウス先生に見えないよつに足を叩く。

なんだよつ！－！

思わずアリウス先生に対する怒りをそのまま茉莉花に視線でぶつける。

諦めよつよ

と、言いたいのか茉莉花は小さく首を振つている。

くわお……

心の奥ではその選択肢しか残つてない事は分かっていた。

最近よく思う。アリウス先生の雰囲気は従兄弟の同じ一ちゃんに似ているけど、性格は母ちゃんに似てるつて。

そう、母ちゃんに似てるんだ。優しいけどすげえマイペースなどころが。

だからビッチも人の話なんか聞きはしないつ！

結局はそこへ結論としてたどり着き、あきらめて絵本を受け取る。

「それでは本田せんじまでこましましょ。また明日伺います」

そう言つてアリウス先生は部屋から出て行つた。

後に残つたのは同情するような茉莉花の視線と、文字の書きすぎで右手をフルフルと痙攣させながら頑垂れるオレ。

そして、手元に残つたタイトルすら分からない一冊の絵本だった。

「モグモグとクル」

むかし一匹の竜がいました。名前はモグモグ。

なんでもなんでも食べちゃうモグモグはあつちでモグモグ、ひつちでモグモグ。

みんなの食べ物も食べちゃうから、いつもみんなから仲間はずれ。そんなあるとき森の中で果物を食べていると一人の男の子と出会いました。名前はクル。

クルは森の果物を分けてほしいとモグモグに言いました。モグモグは自分が食べるから駄目だよと言つて、森の外へ追い返しました。

次の日またクルが来て果物を分けてほしいと言いました。モグモグはやっぱり嫌でクルを追い返しました。

次の日またクルが来て果物を分けてほしいと言いました。モグモグは不思議に思つて聞きました。なんでこの果物がほしいの。

そしたらクルは言いました。もうここしか果物は無いんだよ。なんでも森の外には怖い怖い怪物がいてみんなの果物を全部食べてしまつたみたいですね。

それに怒つたモグモグはそんな悪い怪物ボクがやつつけやる。と言つてクルと一緒に怪物を探す旅に出ました。

「そして怪物が自分のことに気付いたモグモグは、みんなの食べ物を勝手に食べないと約束をして仲良く暮らしました」

手に持った絵本の内容を話し終え、パタンッと絵本を閉じた音を最後に部屋が静寂に包まる。

アリウス先生は正面の椅子に座ったまま目を瞑り、何も言わない自信は有る。けれどテスト返却の順番待ちをしていくよつた緊張感が、心臓を勝手にバクンッバクンッと動かす。

ゆっくりとアリウス先生が立ち上がる。その雰囲気に危険なものを感じない。と思つ。

「良く頑張りました。太陽様。合格です」

柔らかい口調と久しぶりに見た笑顔に安堵の息をつく。
長かつた。右腕を擦りながら視界が涙で滲む。達成感と開放感に心を委ねながら、ここまで十日間を思い出す。

地獄だつた……。思わず違つ意味で涙が出そうになる。

オレに絵本を渡したあの日、アリウス先生は勉強方法を変えるつて確かに言つてた。だから書き取りよりはまだと思ってオレは喜んでいたんだ。次ぎの日現実を知るまでは。そう実際は変えるじやなく追加する。だつたんだ。

正直右腕は限界だ。結局全部で三週間以上毎日欠かさずに書き取り練習をしているオレの右腕は、今現在も常にブルブルと震えている。最近では朝起きたら右腕に話しかけるようになった。今日も一緒に頑張ろうつて。

特にここ一、三日はかなり精神的に追い込まれた。茉莉花もさすがに見かねたのか、一昨日からこつそりと日記を書くのを手伝ってくれてる。そして昨日の夜、とうとう少しづつ進めていた絵本の翻

訳が終わった。といつても毎日夜遅くまで、エティねーちゃんがアリウス先生に習つたはずの文法や単語を教えていてくれたことは絶対に、絶対に秘密だつ。

「それでは本田の授業はモグモグとクルについて学びましょう」

アリウス先生の言葉でハツと我に返る。と同時に疑問も湧く。隣を見てみると茉莉花も分からぬのか首を捻つてる。

「この絵本を渡すときにお伝えしたと思いますが、選ぶ絵本は歴史か創世神話を元にしたものを選ばせて頂きます。そしてこの『モグモグとクル』は歴史上存在した人物を基に制作されました」

確かにそう言つていた氣もある。まあ疎覚えだけど。

「最初から順を追つて説明します。まず、お二人はラーヌソレルと言つ言葉を覚えていらっしゃいますか」

ラーヌソレル。聞き覚えがある。たぶん最初の日だ。できるだけ思い出さないようにしてるので、そうじやなくともあの日の記憶はひどく曖昧だ。それに思い出すと気持ちが否応無く沈む。

「ラーヌの神徒ですか？」

茉莉花の答えにアリウス先生が満足げに頷く。

「そうです。今代の神徒は太陽様と茉莉花様のお二人が存在されていますが、本来ならば神徒は三人、ファシュシユース、シャスアーシユース、ラーヌソレルとなります。しかし1326年以降ラーヌソレルの召喚は確認されず、現在までの約1600年間、神徒は常

に一人となつてきました。その理由がモグモグのモデルになつた人物ウルーマ・ハマド。第26代ラーヌソレルであり、最後のラーヌの神徒に選ばれた人物にあります」

そこまで言い終えてアリウス先生は一息つく。

「一瞬、ちゃんと聞いていますか、といつよつこいつを見たのは、気のせいだと思いたい……」

「なぜ彼が最後になつてしまつたのかご説明する前にラーヌソレルの想化をご説明いたしましょう。この想化は名称を竜化と言い、能力は人としての力を大幅に超えた肉体強化です。しかしここで重要なのはもう一つの能力。いえ特徴にあります」

そこでアリウス先生は一呼吸し、緩んでいた空気を締めなおすよう間に置く。

オレを見る視線に力が籠り、雰囲気が変わる。

「ラーヌの神徒は死後その肉体が竜に変化するのです」

「死んだあと」

茉莉花が呟くように確認する。

「そうです。そして創世暦1326年ウルーマ・ハマド死去後に起つた竜化に起因して一つの戦争が起こります。後に神滅戦争と言われる物となつたこの戦争での犠牲はこの国だけでも主要都市が二つ、地方都市が八つ、人口で言えば当時の三割は超えたのではないかと言われています。実際戦争と言われていますが、事実は一方的な虐殺です」

茉莉花のかオレなのか分からなかつたけど、ゴクリッとのどを鳴らす音が聞こえた。

「そして敵となつたのは一匹の竜。のちに神喰いの竜と伝えられるウルーマ・ハマドの竜化したものでした」

「この国でも軍を用いて応戦しましたが、ほぼ壊滅状態になつたと言われています。そして国として打つ手が無く、滅亡の一途にあつたこの事態を大きく動かしたのが、クルのモデルになつた人物。当時の第22代ファシュシコースであつたクル・ヌギアです」

クル・ヌギア。オレと同じファムリスの神徒……

「クル・ヌギアがどういった手段を用いたのかは不明ですが、結果としてクル・ヌギアは竜化したのです。そして最終的にはウルーマ・ハマドとクル・ヌギアが双方共に消滅し戦争は終結しました。その後ラーヌが神徒を召喚することは現在まで一度も無く、その理由として不明であるクルの竜化がラーヌの降臨で双方消滅したことによりラーヌ自体も消滅したのではないかと仮説が立てられたことから、後に神滅戦争、神喰いの竜と言われる所以となりました」

部屋の空気が冷たい。話の内容もけして明るい物ではなかつたけど、原因是それじゃない。原因是アリウス先生だ。なぜなら話し終えたアリウス先生は未だに強い視線でオレを見つめる。その視線は怒っている時とは違うけど、なにかそら恐ろしいものを感じる。

「太陽様」

アリウス先生に名前を呼ばれる。強い感情の籠められた冷たい真剣な声で。

「この国でファシュシユースが守護者と言われているのはクル・ヌギアがその身を賭してこの国を守った為です。もちろん太陽様がこの世界に来られたのはファムリスが強制的に召喚されたことが原因です。それは理解しています。しかし召喚されこの場にいる以上太陽様が生きる世界はミルアーラであり、このアナシウスであることも変えられない事実なのです。自覚をお持ちになつてください。この世界で生きる太陽様は第52代ファシュシユースであり、この国の守護者なのです」

掛け布団を頭から被りその中で膝を抱える。いつもならもう寝てる時間なのに今日は眠気が全然来ない。昼間アリウス先生から言われたことが頭から離れないから。

「自覚をお持ちになつてください。この世界で生きる太陽様は第52代ファシュシユースでありこの国の守護者なのです」

そればかりが気になつて、さつきから頭の中がグルグルしてる。

この国に来て、初めてファシュシユースって言われてカッコいいって思った。なんとなく勇者みたいに思つたから。でもそれは間違いじゃなかつた。昔のファシュシユースだったクル・ヌギアはこの

国の本物の守護者だつた。それからこの国のファシュシコースは守護者つて言われてる。だからオレも。第52代ファシュシコースのオレも守護者。

元々オレの夢は勇者インサイダーみたいに世界を守る正義の味方になることだから、それが無理やり連れて来られたこの世界で少し違うけど叶つたんだと思つ。そのことは正直嬉しかつた。勇者みたいだったから。けどアリウス先生は自覚を持ってつて言つていた。たぶんクルみたいになれて。オレは、本当のオレはなにもできないのに。アリウス先生だつて分かつてははずなのに……

確かに昔、クルは竜に立ち向かつた。この国の守護者だから。だけどクルは死んだ。この国を守るために。

オレも竜が出来たら戦わなくちゃいけない？ この国の守護者だから？

そんなこと無理だよ……できるはずないじゃん……

死ぬことが分かつていても戦わなくちゃいけない。クルみたいに、クルみたいに、クルみたいに。

絶対できない…………怖い、怖いよお…………

それでもそれがこの世界でオレが生きていくための役割。この国のみんなが言うオレの役割。

この世界で竜が生まれる事はもう無い。そうアリウス先生は言つていた。けど。それでも怖い。

なんで？ なんでオレなんだよお。

涙が溢れる。居もしない竜に怯えて体が震えてくる。いなーって分かつてゐるのに。

もしかしたらつて想像が頭から離れない。離れてくれない。

オレは、オレは無理やり連れて来られただけなのにつ。どうして

正義の味方になりたかった。けど、こんなのオレがなりたかった正義の味方じやないつ。

いやだつ。

もう苦しいんだよお。

だから助けて。

助けてよお。

母ちゃん……

父ちゃん……

寂しくて苦しくて、この世界にいない一人に縋つてしまつわかつてゐつ。本当はわかつてゐよつ。けど、けど

「…………母ちゃん…………父ちゃん…………あい…………いもう」

夢見た夢は叶つたけれど、叶つた夢の重さを知つた初めての夜。

誰もいない暗闇に届くはずも無い願いが消えていった。

あれからファシュシユースのことをずっと考へてゐる。どうすればみんなの守護者になれるかずっと考へてる。でも答えなんか見つからない。アリウス先生の言つてた自覚つて何なんだろう?

やつぱりクルみたいになれつてことなのかな。けど、どうすればクルみたいになれるんだよ。わかんない。わかんないよ、アリウス先生

「コンツコンツ」

ノックの音で何十回と回つていった思考が止まる。

「太陽様。夕食の準備が整いました。今もお部屋でお上がりなさいますか」

「あ、……うん」

一瞬返す言葉に迷つた。けれど、口から出でたのはここ数日間と同じ言葉。

その返事をした後で部屋が薄暗いことに気が付く。部屋の明かりは灯されてないし、灯した覚えも無い。窓から入る僅かな月明かりだけが夜の闇に包まれたこの部屋を照らし出している。どうやら考え事をしていただけで、夕食の時間になつたことに気が付かなかつたみたいだ。昼過ぎに終わった授業からずっと。

原因はもちろんアリウス先生の自覚を持ってと言われた言葉。その

せいで最近は食欲もあんまり無い。それに今まで昼食と夕食は茉莉花と一緒に食べてたけど、ここ一週間はお互の部屋で食べてる。心配そうな田で見てくる茉莉花となんとなく一緒に居辛いから。

「失礼します」

その一言と共に入ってきたエティねーちゃんは、何も言わずに部屋の燭台を順に灯し、そのまま流れるような動きで予め用意していた夕食を机に並べ始めた。

火を灯された燭台の明るさに微かな眩しさを感じ、突然明かりを受けたエティねーちゃんに文句を言いたくなつたけど、結局オレもエティねーちゃんには何も声を掛けず、そのまま用意を済々とこなすエティねーちゃんの後ろ姿をぼつとベットの上から眺めた。しばらく食器を並べる音だけが部屋に響く。その音を聞きながら、ふと浮かんだ疑問をエティねーちゃんに聞きたくなつた。

「ねえ、エティねーちゃん」

オレの言葉にエティねーちゃんは手を休め、体^じとオレのほうを向けてくれる。

「はい。いかがなさいました」

「第51代のファシュシユースってどんな人だつた?」

「先代のファス様ですか」

その言葉に疑問を感じ、そのまま口に出して聞いてみる。

「ファスつて?」

「失礼しました。市民の間ではファシュシユース様をファス様と省略して呼ばれる」とが「やりますので」

ふーん。ならオレは第52代ファスつてことか。

「で、そのオレの前のファスつてどんなんだつたの」

「そうですね。第51代ファシュシユースであつたオスヴァルト・メンデル様は謹厳実直。公明正大な方だつたと聞いています」

きんげーじゅちゃん? ジーセーメーだい?

「1)あんわつちゅつと簡単!」

「…………」

急に音の無くなつた部屋になんとなく居心地の悪い間が広がる。

ぬあ、こつまで経つてもこの沈黙は慣れないなあ
エティねーちゃん考えているとせむジッと見てくるから怖いんだよー

「…………」

「…………真面目で正直者。さらに公平で心の綺麗な方だつたと聞いています」

やつと音の戻つた部屋に少しほつとしつつ、エティねーちゃんの言葉でイメージを膨らませてみる。

「へえ。んじゃ茉莉花みたいな感じかあ」

なんか優しそうな感じだし会つてみたいなあ……

「はい。もう亡くなられて四年になりますが、今でも先代ファシュシユース様を惜しまれる声をたびたび聞きます」

一瞬会つてみたいと思つた自分が馬鹿みたいに感じる。この世界でファシュシユースはいつも一人だ。

「各地に赴き」自身の力とは関係なく民衆を救おうとした姿が、皆の心を打たれたのでしょうか？」

何かを思い出すように手を組めて話すエティねーちゃん言葉から、なんとなく優しい気持ちがする。

「そつかあ、オレの前の人も頑張つてたんだ」

「そうです。だからこそ民衆が次のファシュシユース様、未だ公表されてはいませんが太陽様に掛ける期待は大きいのです」

その言葉で気持ちに影が射す。

みんなの期待か……

アリウス先生。オレどつすれば良いんだよ。

また同じ疑問をグルグルと考え始めたオレ見て、会話が終わつたと判断したのか、エティねーちゃんが夕食の準備を再開する。

オレたち二人がいる部屋を食器を置く際の僅かな音だけが支配す

る。

「太陽様。夕食の準備が整いました。どうぞお席へお掛けになつてください」

その言葉に従いノロノロと移動し、エティねーちゃんが引いてくれた椅子に座わる。けど夕食を見てもやつぱり食欲は湧いてこない。

「太陽様？」

座つても食事に手を付けないオレを心配してくれているのか、茉莉花みたいな目で見ながらエティねーちゃんがオレの名前を呼ぶ。

「そりいやなんでオレたちつてみんなに知らされてないのかな」

「それはメンデル司祭に確認を取りなくては憶測の範囲となりますが、おそらく年齢の問題ではないでしょうか」

唐突過ぎる質問にいつもの調子でエティねーちゃんは答えてくれた。でも誤魔化し切れてない。まだ茉莉花みたいな目でオレを見る。

「そんな理由なの？」

「憶測ですが」

「そつか。ほかにもつと理由があるかと思つてた」

ただエティねーちゃんの目から逃れたくてした質問だつたけど、聞いた答えは意外だ。

「ただし今まで神徒の召喚は五年以上開いた事がございません。ですから少なくとも太陽様は今年度中に公表されると思います」

「茉莉花は？」

「場合によつては同時に公表する可能性もありますが、先代のシャス様が亡くなられて一年も経つていませんのでまだ先になると考えるのが妥当でしょう」

そつか。オレだけもう少しで……

「太陽様」

「なに？」

エティねーちゃんはあんまり自分から話題を振つてこないけど多分……

「なにかお悩みがあるのでないでしょうか？」

眼鏡の奥で細められたその目は「あるのではないですか？」ではなく「あるのでしょうか話しなさい」と込められている気がして、小さくだけどため息が漏れた。

一瞬の間、その僅かな時間で覚悟を決める。確かに聞かれたくな質問だつたけど、本当は聞いて欲しかつたその質問に答えることを。

「……うん。守護者つてさ、なにをすればいいのかなあって」

「守護者の在り方。ですか」

「前の人も偉かつたんでしょ。だけどオレはなんにもできないしさ」

なんとなく顔が引きつる様な笑顔になる。別に笑いたくないのに。

「……太陽様はファシュシユースとはどういった者だと考えていますか？」

なぜだか少しだけおっかない声で質問するエティねーちゃんに内心怯えつつ、眞面目に考えてみる。

「うーん。クルみたいにみんなを守る人で、前の人みたいにみんなの人気者。かなあ」

「それでは太陽様自身は皆をなにから守るのでしきうか」

それは……

「……竜とか？」

最初に思いついたのはやつぱりそれだ。けど

「もはやこのミルアーラに竜は存在しません」

簡単に否定される。確かにアリウス先生も言つてたけどさ。

「それじゃあ、地震とか火事とか台風とか」

「天災ですか。確かに先見を使えば可能なのでしょう

頑張つて考えてみたけどそのぐらいしか思いつかない。けれどエティねーちゃんはオレの答えに不満みたいだ。だってエティねーちゃんの眉間に皺がよつてるし……

「それでは質問を変えます。太陽様は誰を守りたいですか？」

「そんなのみんなだよ。だつてオレはファシューシュースだし」

「これは簡単だ。だつて守護者なら当たり前じやん。

「見たこともない知らない人をですか？」

「そうだよ。だつてそれがオレの役割じやん」

「それは確かに皆が太陽様に望む事の一つなのでしょう。しかし太陽様は全ての人々をあらゆる天災から守ることはできますか？」

「それは……」

「……無理だよ。だつてオレはクルみたいにすげい守護者じゃないよ。

視界が涙で霞むのが分かる。エティねーちゃんの意地悪な質問に悔しさが募る。

「太陽様。全ての人々を救うことなど、どんなに優れた歴代のファシュース様であるうとも無理なのです。最終的にこの国を救つたクル・ヌギアですらそこまでに何千万という犠牲を出したのですから」

その言葉にハツとなる。溢れかけた涙を袖で拭い、ジッと見つめてくるエティねーちゃんの視線を見つめ返す。

「太陽様はこのミルアーラで誰を守りたいのですか？」

さつきと違つて優しい声で聞かれた質問に、この世界での短い日々を思い返す。

「…………茉莉花…………それにエティねーちゃんにレーねーちゃん。アリウス先生も」

「…………ありがとひびきります。太陽様」

エティねーちゃんが優しい笑顔と声で、ありがとひびきオレに告げる。正直ドキッとした。だつてエティねーちゃんが笑うの初めて見た。

「……続きを。それでは茉莉花様をいついたなにから守るのでしょうか？」

オレがびっくりして見ているのに気が付いたのか、またいつもの顔に戻つて淡々とオレに質問する。

ありや、勿体ない。エティねーちゃんは笑つてたほうが美人さんなのに。

「その答えがこの国の皆がファシュシコース様に真に望むものです。太陽様ゆつくりとお考えになつて答えをお出し下せこ」

答えないオレが考へているものだと思つたのか、質問の答えを宿題にしてエティねーちゃんが話を終わりにする。

「では太陽様。夕食を温め直しましょ」

そう言つてエティねーちゃんがテキパキと一度出した食事を片付ける。

確かに大分話し込んだから、片付けられていく夕飯はすっかり冷たそうになっている。
エティねーちゃんが片付けをする間、やるこじも無いからその様子をぼうっと眺めていると一つのこと二氣が付く。

なんかせつままで重く沈んでた気持ちが軽くなつたかも。

「キュウウウ

さつきまで食欲を感じなかつたのにお腹の音が空腹を告げる。

「急いで温め直して参りますので、少々お待ち下さい

そう言って下げる夕食を持って、足早にエティねーちゃんは出て行つた。

「キュウウウ

再度お腹の音がオレに空腹を告げる。

……なんだかオレのお腹も軽くなつたみたいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1966f/>

二つの月に、一つの願いを

2010年11月29日07時15分発行